

# マサチューセッツ州ローウェルにおける 反アボリショニスト暴動をめぐって

久 田 由佳子

1830年代、アメリカ合衆国北部では<sup>アボリショニスト</sup>奴隷制即時廃止論者が標的となる、反アボリショニスト暴動が頻発した。各地で奴隷制廃止論者の集会が妨害され、会場となった建物が破壊され、時には1837年、イリノイ州オールのイライジャ・ラヴジョイのような死傷者を出すこともあった。反アボリショニスト暴動については、古くはボストンの暴動の際、暴徒の攻撃からウィリアム・ロイド・ギャリソンを守るべく、彼を監獄で「保護した」とされるボストン市長セオドア・ライマンの息子が父の汚名をそそぐために編纂した史料集が1870年に出版されており、1970年には、1960年代の人種暴動やキング牧師らの暗殺といった暴力に対する問題関心から、レナード・L・リチャーズが反アボリショニスト暴動に関する研究を発表した。比較的最近では、ジャクソン期から南北戦争開始までの暴動に関する研究がデイヴィッド・グリムステッドによっておこなわれている。またこうした暴動の背景にある白人優位性の研究もデイヴィッド・ローディガーを中心に進められている<sup>1)</sup>。

1834年と1835年に開催されたイギリス人アボリショニスト、ジョージ・トムソンによる講演会は、特に外国人による内政干渉として反発を受けることが多く、各地で暴動がおこったが、当時、綿工業都市として急速に発展していたマサチューセッツ州ローウェルにおいても例外ではなかった。本稿では、このうち1834年に開催されたジョージ・トムソンによる講演会に対する暴力的な妨害行動と当時のアボリショニストの動向について、当時の新聞記事を中心に紹介する。

\*\*\*\*\*

1834年秋、ジョージ・トムソンはウィリアム・ロイド・ギャリソンらの招きで初めてアメリカを訪問し、各地で講演をおこなった。トムソンの講演会は、多くの聴衆を集めた一方、会場の外ではこれに抗議する暴動が

頻発した。ローウェルでは、1834年10月の講演会に引き続いて、11月末から12月にかけても講演会が開かれた。12月5日付の地元週刊紙『ローウェル・パトリオット』には、一奴隷廃止論者と名乗る人物による次のような投書が掲載された。

先の安息日〔11月30日〕と月曜日〔12月1日〕の晩、ローウェルタウンホール町庁舎で行われた講演会は、多くの聴衆を引きつけた。2日目の晩は、外にいる人々の足を踏みならず音やわめき声、野次で講演が妨害され、ステージ後方の窓から投げこまれた煉瓦片が、彼〔トムソン〕の頭の1、2フィート上をかすめた。火曜の晩も講演会の開催が予告されており、町の行政委員たちは、治安維持に抜かりないと断言し、我々に町庁舎の使用を許可していた。しかし行政委員は、その後、月曜のこうした騒動から察して、警官の援助なしでは暴徒の襲撃から集会を守ることができないと判断した。その夜は非常に暗く、窓には鎧戸も日よけもなかったため、わが協会の幹事たちは、水曜の午後まで講演会を延期することにした。〔水曜日の〕講演会は平和裏に終了した<sup>2)</sup>。

各地で行われたトムソンの講演会の様子は、ギャリソンの発行する新聞『リベレーター』解放者で紹介されたが、ローウェルの講演会についても報告が寄せられた。

(前略)我々は講演会を開催するために、行政委員から、普段タウンミーティングが行われている町庁舎の部屋を使用する許可を得ていた。この部屋の使用は、違法で明らかに不道德な目的でない限り、たいていの場合許可されている。

安息日の晩、トムソン氏はすばらしい講演を行い、聖書が奴隷制を認めているという議論を論破した。大勢の聴衆は皆、夜遅くまで彼の話に聞き入った。大きな石が一度、窓から投げ込まれかけたが、窓枠に当たって外側に落ちたほかは、特に妨害もなかった。その夜、翌月曜の講演会は夜8時から開催予定であると告げられ、我々は夕方6時半から討論会を開くことにした。(中略)

月曜日、我が幹事会は、昨年冬に我々の協会発足に対する公的な反対行動に積極的に関与した紳士たちに対して、事前討論会への特別招待状

を送った。彼らは全員辞退してきたので、この会には奴隷廃止論者以外は参加せず、ただの1つも批判も質問も出なかったのは残念であった。(中略)

その後2時間近くにわたって行われた講演会は、サン・ドマングの歴史——この歴史こそ多くの人々の心に奴隷解放に対する不安を抱かせてきた——をテーマとしたが、講演の中で実態が明らかにされると、奴隷制即時廃止こそが「奴隷反乱を防ぐ」安全策であるとの理解が得られたようである。時間の長さとはまざる内容にもかかわらず、講演が終わるまでは途中退席する者もほとんどいなかった。

〔町庁舎の〕階段を上ったところにある、ドアのない部屋の入り口付近では、講演の前半に少数の下品な連中が足を踏みみらしたり、わめきたたてたり、野次を飛ばすなどして講演会を妨害し、断続的に30分ほど続いたが、警官が駆けつけると羊のようにおとなしくなった。その後しばらくすると、講演者の後方〔の窓〕から建物に向かって3度何かが投げ込まれた。3度目、すなわち最後に投げ込まれたのは大きな煉瓦片で、講演者の頭上をかすめたものの、誰にも被害を与えることなく、前列にいた聴衆の前に落下した。これらの物は、天井の高い建物の2階の窓から入って、壁から離れたところに落ちたので、相当の力で投げられたようである。もし角度が少しずれていたら、饒舌な我が友を永遠に沈黙させるところであった<sup>3)</sup>。

トムソンはこうした状況に動じることなく話し続け、講演会は無事終了したが、翌日も予定されていた講演会は結局のところ、翌々日の午後に延期された。当初は、様々な暴力行為の噂にもかかわらず開催する予定であったが、最終的に行政委員が、無防備な町庁舎の広間では講演者や主催者を暴力から守ることができないと判断し、主催者側もそれを受け入れたためである<sup>4)</sup>。

『リベレーター』紙は講演会の妨害を「臆病と狼藉」として報じつつ、2回目の講演会の翌朝〔12月2日〕に次のような「愛国的な」ビラが出回ったことを明らかにした。

ローウェルの市民よ、立ち上がれ！ 諸君の諸利益をよく考えたまえ。  
ローウェルで世論をかき立てられている問題のために苦しむことになっ

てもよいのか。これは連邦の安全を危機にさらすものである。この問題に対して干渉することについては、我々が憲法はいかなる権利も保障していない。我が仲間の市民よ、我が国の平和と調和を乱そうとするイギリス人を痛い目に遭わせる最初の場所をローウェルにしようではないか。それとも諸君はイギリス人から教を請うことを望むのか。もし諸君がアメリカの自由民の息子なら、今晚7時半に町庁舎に集合せよ。そして我々が、南部の同胞の諸権利に干渉しないことを態度で示そう<sup>5)</sup>。

『ローウェル・パトリオット』紙も、トムソンに対する脅迫のビラがばらまかれていたことを報じた。

1834年12月2日 ローウェルにて

トムソン博士殿

拝啓

友人として、貴殿に次のお知らせをするご無礼をお許し下さい。貴殿を消えないインクの桶の中に沈めようとする陰謀が計画されております。故に、我が国のこの地域から即刻ご出発することをお薦めいたします。さもなければ、貴殿のもう一人のご息子が生まれる前にこの陰謀が実行されることは確かです。

敬具

アメリカ合衆国市民より

同紙は、アメリカ生まれの合衆国市民がわざわざこのように名乗ることはなく、移民の仕業である可能性が高いことを示唆した。続けて同紙は、反アポリショニスト集会でおこなわれた決議やギャリソンのコメントなどを掲載した。しかし残念なことに、ボストン公共図書館に保存されているマイクロフィルムの状態が悪く（あるいはオリジナルの新聞の印刷が不鮮明である可能性もある）、判読できない部分が多い<sup>6)</sup>。そこで、ここではそれ以外の新聞記事から引用する。

トムソンの講演会に対抗して開かれた反アポリショニスト集会は、奴隷制即時廃止が財産権を保障する合衆国憲法修正第4条に違反しており、イギリス人トムソンによる講演会が内政干渉であるという立場から開かれた。この集会について、『リベレーター』紙は次のようなコメントを発表

した。

不平分子たちは、昨夜 [12月2日]、講演会が延期されただけでは満足できなかったようである。彼らは、町庁舎の広間を再度開場し、一種の暴民政治集会を開催したのである。この種の集会にしては珍しく、静かで秩序が保たれていた<sup>7)</sup>。

彼らが可決した決議には、彼らが奴隷制の存在を非常に遺憾に思っていること、しかしこの問題 [奴隷制廃止] をここで世論に訴えるのは非常に不適當であり、ゆえに町庁舎がこの問題のために使われるべきではないという意見を行政委員に伝えることなどが盛り込まれていた<sup>8)</sup>。

他方、『ローウェル・マーキュリー』紙は、次のような記事を掲載し、暴力に訴えた講演会の妨害そのものに対しては否定的な態度をとりつつも、反アポリショニズムを擁護した。

ニューイングランド人は、外国人、すなわち外国政府の臣民 [トムソン] から、自らの義務がなんたるかを説教されるのを許すほどのお人好しであり、地域社会を揺るがして、政府を脅威に陥れかねない最も繊細な問題への取り組みを外国人に任せるほど寛大なようである。(中略)

とはいえ暴動は論外であり、一般に予期しない結果をもたらす。秩序の維持と公正を求める人々の道理からすれば、往々にして、有害な集団を重要なものに変えてしまいかねないのである。(中略)

奴隷制反対協会に対する批判を表明しようとするのであれば、暴動は、確かに最も効果的な表現方法ではない。この町 [ローウェル] の世論の傾向は、明らかにこの問題 [アポリショニズム] に対して批判的であるし、もし市民集会が開かれれば、これに反対する決議が採択されることは明白である。この問題について唯一の疑問は、当地の反奴隷制団体が、こうした表現方法 [暴力行為] を必要とするほど大きいのかという点であるが、我々はそうではないと考える。(中略)

月曜の晩、ちょっとした騒動が起こったが、これは入り口にいた少年たちに限った問題であり、卑劣な無法者によってもものが投げ込まれるという出来事もあったが、我々はこれを重大な問題として取り上げるほどのことではないと考えている。火曜日の集会が、騒動や暴力に対する懸

念から延期されたことは我々も理解しているが、こうした懸念が根拠に基づくものだったか否かは不明である——我々はそうではないことを期待している。(中略)

火曜の晩、我々はまったく集会延期を知らないまま、むろんトムソン氏の講演を聴くために町庁舎に向いた。町庁舎に到着すると、建物内は集会のために明かりがともされていた。聞くところでは、奴隷制反対協会の運動に批判的な人々が呼びかけた集会であるという。この集会が、暴力行為——これが意図されたものであったと仮定して——におよぼうとしていた人々と関係があったかどうか、我々は知らないが、そのような関係は存在しなかったと信じている。この集会が、物静かで秩序ある、尊敬されうる市民で構成されていたからであり、彼らの多くは、講演を聴きに来ていたし、そうでない者もこの集会が招集されて初めてここに集まったからである<sup>9)</sup>。

この反アポリシヨニスト集会では、議長と書記長、決議案作成のために3人の委員が選出されたが、『リベレーター』紙は、この5人が暴徒の指導者であると推測し、トムソンを囲む討論会の出席にも応じられない臆病者と断じた<sup>10)</sup>。

議長に選出されたのはサミュエル・A・コバーンで、「エスクワイア」の敬称で呼ばれていたことから察して、地元の名士といった印象を受けるが、1835年の人名録によれば、「メリマックハウス」という宿屋の経営者であり、当時、町政記録係も務めていた人物である。同様に書記長は歯科医のJ・N・サムナー、決議案作成委員会のメンバーは、弁護士で「エスクワイア」の敬称で呼ばれるトマス・ホプキンソンとジョン・P・ロビンソン、西インド産品と食料品を扱う卸・小売商店主のP・H・ウィラードであった<sup>11)</sup>。

現時点では、これら反アポリシヨニスト集会の指導者たちが、講演会の妨害に加わっていたのかどうかは不明であるが、仕事柄、西インド諸島の砂糖プランテーションと強く結びついていたと考えられるウィラードが、この集会の発起人であったことは合点がいく。一方、弁護士や医師などがこの集会を組織していた点は、ボストンなどの他の町で起こった同様の事件との共通点も多かった<sup>12)</sup>。

こうした妨害にもかかわらず、講演を聴いた女性たちが奴隷制反対協会

を設立したことについて、『リベレーター』紙は次のように報じている。

火曜日の成り行きで、女性<sup>レディ</sup>たちの間で奴隷制反対協会が設立されることになった。コンコードと同様、ローウェルでも——この騒乱のさなかに、女性<sup>レディ</sup>たちは勇敢にも模範的な献身的行動に出たのである<sup>13)</sup>。

女性の奴隷制廃止団体に関する研究をおこなったB・A・サレーノは、千人近くの女性の聴衆がトムソンの講演を聞いた後、奴隷制反対協会を設立し、その多くが女工であったと結論づけている。しかし、彼女が根拠としてあげた1834年12月6日付の『リベレーター』の記事は、これら「レディ」と呼ばれた女性たちが女工であったとは断定していない<sup>14)</sup>。

確かに『リベレーター』の定期購読者の中には、後に雑誌『ローウェル・オファリング』の編集者となるハリエット・ファリーのような女工もふくまれていた<sup>15)</sup>。また、ファリーと対立するサラ・G・バグリィが編集をつとめる『ヴォイス・オヴ・インダストリー』紙も、ギャリソンの『リベレーター』紙批判の記事を掲載する一方、北部の賃金奴隷制廃止とともに南部奴隷制の廃止を訴える記事をしばしば掲載していたことは事実である<sup>16)</sup>。

さらに1838年には、ローウェルから連邦議会下院に対して、首都ワシントンにおける奴隷制廃止と合衆国内の奴隷売買禁止を求める請願書が提出されていた。ローウェルから提出された署名の数は1400以上にのぼり、これは同じマサチューセッツ州の他の町から提出された署名数と比較しても多かった。同年の人口データはないが、1840年の国勢調査の人口統計で計算すれば、請願書への署名者は、ローウェルの女性全体のおよそ10%を占めていることになる<sup>17)</sup>。

こうした状況からローウェルの女工たちは、奴隷制廃止運動に深く関わっていたという印象を当時から現在に至るまで強く与えている。こうした印象によるためか、ローウェルにおける反アポリショニズムの動きは、ボストンやニューヨークなどの都市と比べて規模が小さいという点があるにせよ、見逃されがちになっている。しかしこれは、当時の政党政治と大きく関わる問題でもある。本稿では、おもに当時の新聞記事を用いて反アポリショニスト暴動の再現を試みたが、より広い文脈の中でとらえることは今後の課題である。

注

- 1) Theodore Lyman, 3rd., *Papers Related the Garrison Mob* (Cambridge, Mass.: Welch, Bigelow, and Co., 1870); Leonard L. Richards, “*Gentlemen of Property and Standing*”: *Anti-Abolition Mobs in Jacksonian America* (New York: Oxford University Press, 1970); David Grimsted, *American Mobbing, 1828–1861: Toward Civil War* (New York: Oxford University Press, 1998); David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class, New Edition* ([1991]; London: Verso, 2007); デイヴィッド・R・ローディガー著、小原豊志・竹中興慈・井川真砂・落合明子訳『アメリカにおける白人意識の構築——労働者階級の形成と人種』(明石書店、2006年)。
- 2) An Abolitionist, “Mr. Thompson,” *Lowell Patriot*, 5 December 1834.
- 3) “Mr. Thompson at Lowell,” *The Liberator*, 6 December 1834.
- 4) Ibid.
- 5) “Cowardice and Ruffianism,” *The Liberator*, 6 December 1834.
- 6) “The Liberator,” *Lowell Patriot*, 12 December 1834.
- 7) “Mr. Thompson at Lowell,” *The Liberator*, 6 December 1834.
- 8) Ibid.
- 9) “Anti-Slavery,” *Lowell Mercury*, 12 December 1834.
- 10) “Cowardice and Ruffianism,” *The Liberator*, 6 December 1834.
- 11) Ibid.; Benjamin Floyd, *The Lowell Directory Containing Names of the Inhabitants, Their Occupation, Places of Business and Dwelling Houses* (Lowell: The Patriot Press, 1835), 38, 74, 115, 128, 143, 154, 162, 171; Advertisements from Benjamin Floyd, *The Lowell Directory Containing Names of the Inhabitants, Their Occupations, Places of Business and Dwelling Houses* (Lowell: The Patriot Press, 1834).
- 12) Richards, “*Gentlemen of Property and Standing*.”
- 13) “Cowardice and Ruffianism,” *The Liberator*, 6 December 1834.
- 14) Beth A. Salerno, *Sister Societies: Women’s Antislavery Organizations in Antebellum America* ([2005]; DeKalb: Northern Illinois University Press, 2008), 29, 44.
- 15) Mail Book of *the Liberator*, Vol. 1: 1831–1839 (Manuscript), Anti-Slavery Collection, Rare Books and Manuscripts Dept., Boston Public Library (BPL), Boston, Mass.
- 16) 例として、*Voice of Industry*, 21 August 1845, 5 December 1845, 27 August 1847.
- 17) Petition of Harriet S. Gridley and 1400 Others, Women of Lowell, Mass. for the



マサチューセッツ州ローウェルにおける反アポリショニスト暴動をめぐって

Abolition of Slavery in the District of Columbia, January 3rd, 1838, Records of the U.S. House of Representatives, National Archives and Records Administration, Washington, D.C. マサチューセッツ州内で最も多くの署名を提出したのは、チャールズタウンとリンで、それぞれ1500を超えた。List of Petitions Passed through the Hand of the Committee of the Boston Female Antislavery Society, n.d. (Manuscript), Anti-Slavery Collection, BPL; *Sixth Census of Enumeration on the Inhabitants of the United States* (Washington, D.C., 1841), 44–45. 1840年当時のローウェルの人口は20,796人、うち女性は13,511人であった。